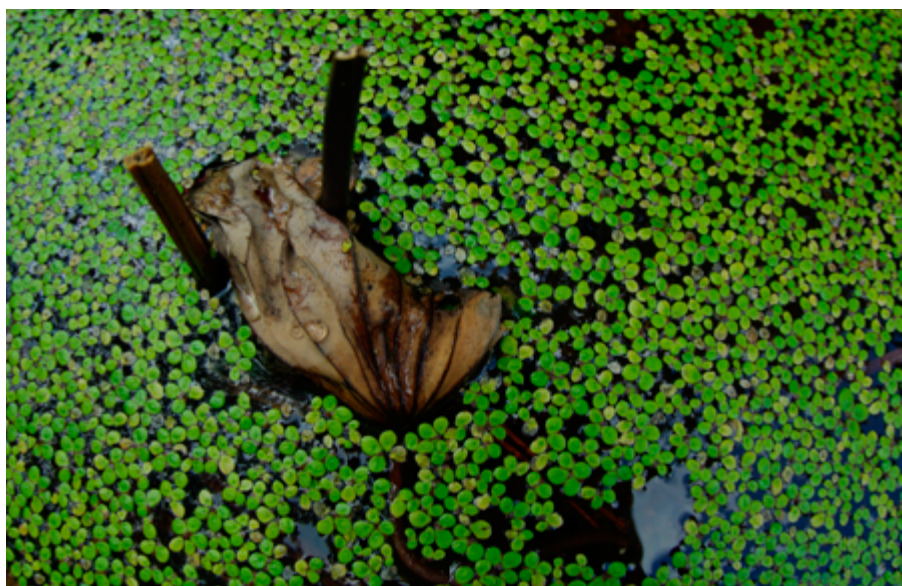


あさ 10
2014



練馬・観蔵院

遠きミャンマー



金の日と金の佛塔叢畑

佐藤喜孝

あそ

十月

音

佐藤喜孝

東京

椎と雲湧きて五月の空せばめ

蝶はバラ科そしてわたしは裏星科

梅雨ごもり鳴る構へせる大時計

眞緑に鐵を塗り夏野原

鐘の音の朝の蓮池わたりきる

秋の海だまってゐるからだまってゐる

犬猫は黙してゆけり獺祭忌



歌仙を三人一組にして始めました。終った組、まだ楽しんでゐる組と様々です。マイペースでお願いします。籤で割振ったのに希少な男三人が一組になりました。最後わたしがメールの見逃しで遅くなつてしまひました。(今号掲載)。発句は三人の頭文字を頂いて折句にしてみました。石動さんが細かく分析をした表を作ってくださいました。この表を見ると歌仙の傾向が分ります。わたしの悪癖にも気がつきました。この表に書きこみながら進めてゆくと進路が見えるやうな気がします。とても細かい分析です。初心者用にもう少し大雑把な分析表があればいいなあと思ひました。可能なら石動さんにお願ひしてみやうと思ひます。終つてみて直したいところもあります。もう生き物のやうで一カ所手を入れると勢いが無くなる気がしました。傷もまた楽しくと云ふところで……

青 柿 森 理 和

東京

青柿のほとんころころ下り出す

入道雲等間隔にへりコプター

暑中見舞一通届き直ぐ返信

お施餓鬼や墓誌の刻みの真新し

緑濃しちよんちよん雀草の中

巨樹巨木写真集見る夏休

もう逢へぬ遠のく列車月見草

☆

吉弘 恭子

東京

行水や手の中にある蒙古斑

コンクリを抜けて隣の藜かな

原爆の日五差路に巡查手を振りて

八月や爆音長靴耳底に

鬼ごっこしてるか藪蚊の逃げあしか

バス旅の昼寝の暇うれしかり

猫ゆきて黒眼こころに二日月

憧れの伊豆大川へ移住とまでは
きませんが、毎週出掛けています。
小さな一軒家を借りました。日常
の買い物は、急坂を下り海辺の大型
のコンビニまで十分程、他にケーキ
山葵、卵は出荷する程の生産者が小
売をしてくれています。喫茶店や蕎
麦屋さんや食堂は無く、駅前の足湯
で一休み、過疎化が進み店は閉店。
雨戸を開けると濡れ縁、胡瓜・茄
子・ミニトマト等の家庭菜園、そし
て青い海と水平線が一望に、が理想
でした。不動産の購入等に伴う煩雑
な事務手続きを考えますと、借家は
手頃、小鳥の声、庭を横切るリス、
心地好い風、恵まれすぎたこの環境
は、脳の老化に拍車が掛かりそうで
す。ところが、来春三月に内孫誕生
の朗報と赤ちゃんのお世話の依頼
に、今の内に大いに満喫しようと
通っています。

八月も過ぎようとしている。
特に八月は私の中に詰め込まれて
いることがある。一つは日本の事、
これは言い尽くされているから今回
はとぼそつ。

10月生まれと生まれてからそう
思っていた。もう何年前になるか、
叔母さんに会った時もうすぐ誕生日
だねと言われた。まだまだ2ヶ月も
あるよと答えた。ああ10月生まれ
になっているんだ。と、突然言われ
た。第二次開戦の2ヶ月前に生まれ
たと思っていて、東京にいたのでず
いぶん大変だったろうなあと思っ
ていた。しかし四ヶ月前と聞かされ、
随分戸惑った。その頃の東京は思
いも及ばないが何か流れが一般市民
にも感じられていたのかなと。父はそ
の頃のかの有名な吉原大門のところ
の巡查をしていたようだ。なぜか戦
争から命あって帰って来た時は、お
じいちゃんのとをついで下駄の職
人になった。今年も夏は下駄を履
てすごした。

残 暑

赤座典子

東京

片陰に黙禱始む長崎忌

くつきりと月中天に止まれり

春迎ふ国の友から残暑見舞

集中豪雨重き実石榴散蒔けり

初栗や甘さ薄くて風味良し

白木槿そよりと吾に向きにけり

嬰兒の薄目開けたり秋日傘

☆

井上石動

山梨

恵林寺の扁額にある残暑かな

薪割の音のロツヂや松虫草

少年の経いさぎよし秋遍路

口笛ひゆうい帰る無月の狸坂

ひゆんひゆんと能生の風車や秋日和

市振の萩ゆかしきを摘みにけり

銀河系宇宙に列し秋の風

最近の気象は、あまりに異常で戸惑うばかりである。立秋を過ぎても、体温より高い気温が続くと思えば、一時間で一日分の雨が降りする。

そして、あることが、今度は、竜巻である。今までは、アメリカの西部劇に出てくる位の認識しか無かったのに、日本の各地に発生し、今年いっぱい可能性があるという。

発生する条件に謎が多く、予測は非常に難しい。警報が出されても、瞬時に屋根が飛び、テニスコートの面まで剥す破壊力にどう対応出来るというのだろうか。

天気予報を欠かさず見て、なるべく家に居るようにし、丈夫な晴雨兼用傘を持ち歩くという日々になってしまった。

秋晴や火口を落つる砂の音

7月号「わが敬愛する俳人たち」27頁に掲載されている宗淵さんの句。当初「火口に落つる」で、蛇笏に示したらしい。それを蛇笏が即「火口を」に直したとか。「に」か、「を」か…である。

以前定規さんが、40年前 芭蕉句の腑分けをなされた…と、記していたが、私も10年前に定規さんと同じようなことをしていた。その時の「てにをは」腑分けは以下の通り。

に	323
も	161
て	156
を	131
は	123
と	42
ば	16
ぞ	13
で	5
が	4
つ	1

芭蕉 982 句 数字は句数

さて、掲句の「に・を」問題ですが、断然「を」だろうと思う。「を」で、砂の動きがにわかに浮き立つ。「に」なり、焦点は「火口」となり、砂の動きの勢いが削がれる。たった一字の違い。だから俳句は怖ろしい。

百日紅

大日向幸江

埼玉

薑を良く食べ体調整へり

うり坊の玉蜀黍畑に消えて行く

のど仏良く動くなり自然薯

街中に鷗飛び交ふ秋出水

百日紅平和を願ひ黙禱す

炊き上げし新米の粒立ってをり

プープーとラッパを吹いて新豆腐

☆

齊藤 裕子

東京

酷暑日や句帳抱へてゐるだけで

手にとつて迷ふてをりぬ鰻の日

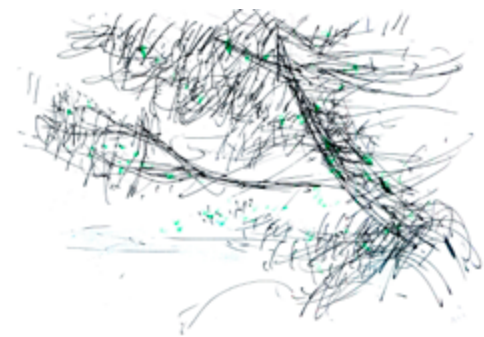
泣き言を母に叱られ夕端居

別れしな母矍鑠と夏帽子

台風や来るなら来いと母が言ふ

再来てふ命の恵み合歡の花

葉鶏頭命が時を刻みゆく



病気が見つかった時、いろんな覚悟をし、自分の人生、時は止まったかのように感じた。

それ迄、一年一年は同じように巡ってきて、いつの間にか過ぎてしまつと、疑つことなく暮らしてきた。

「あれから一年が経った。」

同じ季節が巡り、寒い冬を耐え、春を迎え桜を愛で、新緑の風を肌に喜び、酷暑を嘆きながらも色んな花に出会った。

去年とは違う思いで、葉鶏頭を眺める。また会えたという思い。一年という時の流れを、いまは愛しく思う。

☆

篠田 純子

東京

昼の蟲時計まはりに浚渫船

潦に秋天ちよんちよん遊ぶ雀二羽

あにおとと草風付けよく笑ふ

ハープで弾く「きらきら星」やゑのこ草

イ・キ・オ・イーと黄色い叫び九月場所

袈裟掛に土付く遠藤秋暑し

秋風や両国橋まではね太鼓

杭

定梶じよう

石川

路地間違へたらしいサングラスを外す

踏切をわが越ゆ西日いよいよ大

遠泳や陸路を霊柩車がすすむ

西日さす瑛瑯引の洗面器

遠雷に逞しきかな梁の反り

待つてゐたやうに朝がほ昇りそむ

繋ぐ牛杭より静か終戦日

九月十五日大相撲を観に行った。

今年二回めとあって少し落ち着いてきた。地下の大広間でちゃんこが食べられると知り直行した。追手風部屋の豆腐入り塩ちゃんこが一杯二百五十円で食べられた。キャベツ、鶏肉、豆腐などがいい出汁で煮えている。遠藤も食べているちゃんこだ、と思うと嬉しい。しかし情報では、遠藤はカレーちゃんこが一番好きらしい。

この日一番の取組みは白鵬と遠藤だ。館内はぐわんぐわんと凄じ事になってきた。相撲を取る方も異常な精神状態になるだろう。声援が喚きになりやがて溜息やら拍手となる。

白鵬が懸賞の束を鷲掴みにする。日が短くなってきたせいなのかはね太鼓に寂しさを感じた。

石動さんから頂いた近信の中に、著名な然る俳人の添削例として、へ酌み交す冷えたシャブリや星祭、を筆削して、「冷えしシャブリや」とした、という。「や」は文語脈なので口語「た」を文語「し」とする、ということなのだ。

思い出して、確か私にもそういうことがあった筈、と探したら、あった。それが今月投句の「待つてゐたやうに」と直したわけだ。

「き」や「し」が過去の意味を持って遣われること現代では殆んどないわけだが、それでも、いつ遣ってもいい、というわけに参らぬ。

「冷えしシャブリ」では眼前のものではなくなる、とは石動さんの言。正しい。

八月

須賀敏子

埼玉

観覧車天辺よりの遠花火

ロボットの行進夏の甲子園

バスの旅八月六日黙祷す

山蛭の棲むとも知らず分け入れり

秋天へ浅黄斑を見失ふ

水着干す少し色褪せ秋に入る

みんなや夢見心地を突然に

赤富士

田中藤穂

東京

赤富士を見よとて叩き起こさるる

蚊遣香独りの家に客のあり

七日目のみんなんか声ふりしぼる

かき氷出前着きたる一家族

前方後円墳と空蝉闇に入る

口数の少なく炎暑つづくなり

転ぶなど師よりの残暑見舞かな



週一回訪れる介護ヘルパーさん達がいろんな新しい情報を聞かせてくれる。「加山雄三って若いわねえ。」「奥さん今はお金さえかければ植毛だって皺伸ばしだって何でも出来るんですよ。」「へえーっ、でも脳内までは無理でしょうね。」
「このお家は静かで別荘に居るみたい。」「へっ、相当破れた別荘ね。」
「この家は小津安二郎監督の映画に出てくるようなお家ですね。」「そう言われればそうねえ。」私は長い事自然にここに居るので意識して考えた事もなかったのだが……かくして毎週水曜日の午後は元気なヘルパーさん達と楽しく過ごしています。あとにちよっぴり心よい疲れが残ります。

小動物

長崎桂子

三重

悪天をともしあれ奮闘梅雨明け

草むらの大小の蟻備へをり

棟あたり見え隠れする黒揚羽

六肢数分跳きゐて蟬絶える

暴風雨幹にたむろの蝸牛

水盤に八月の葉を浮かべけり

八月の繕ふ針はのろまです

今回の台風十一号の影響は長くて本当に大変だった。前日から時には強く降る日時があり、八月九日夕方六時少し前、以前から独居老人に四日市市から貸与されていた緊急告知ラジオの急に甲高い声がした。が最初は理解できなかった。そして「数十年に一度の災害の警戒で三重県に大雨特別警報が出ましたので、四日市市の全世帯に避難指示を発令します。夜で避難に困難な方は家の二階など安全な場所で命を守って下さい。」と放送が繰り返された。

この凄まじいどしゃ降りの最中避難場所へ行く勇氣は無く、テレビとラジオを頼りに一晩すごした。翌日も落ち着く事は出来ず、吹き降りに激しい物音の絶えぬ不安の中、やっと午後五時を廻りテレビに三重県大雨特別警報と凡てのの警報を解除と放映され、ほっとした次第でした。

翌日の夕方のテレビに四日市市の防災の係の方が出て「初めての事で準備も余裕もなく全世帯の発言になり今後は此の事を教訓にします」その後三重県知事は今回の事を充分に検証して今後の避難指示の発令の参考に致します。と翌日の紙面にも、全市避難指示に戸惑、と大きく出て百十八ヶ所の避難所に来た人は、ピーク時で四百七十人のみ、市側はマニュアル見直しを検討すると言った。

此の度恭子さんからは、御見舞のお電話を頂戴致しまして、申し訳ございませんでした。恐縮致しております。

心より、ありがとうございます。

あをキーワード俳句辞典(くさーくさ)

くさくさ

緋目高も販ぎ朝市品くさくさ

定梶じょう

臭し

兜虫描く厨の焦げ臭し

東 亜 未

後手に閉めて別れて黴臭し

篠田 純子

青臭しトマトのわき芽つみし指

竹内 弘子

半夏生己の手足生臭し

田中 藤穂

青臭し初もろこしの直売所

赤座 典子

草田男

百歳の秋不死男展草田男も春一も

堀内 一郎

草田男忌ゆふげの卓の青魚

竹内 弘子

草団子

唐草の風呂敷包み草団子

吉弘 恭子

草野

崩れ初む草野にありて蛍草

森 理和

草色

草花は息詰めしごと冬の庭
寒土用露地の草花馨しき
草花に寄ればつと飛ぶ秋の蝶
初蝶のまづ草花に挨拶す

山莊 慶子
長崎 桂子
長崎 桂子
鈴木多枝子

楔

春めいて梯子は楔弛みけり

定梶じょう

草箒

冬晴や棟梁が使ふ草箒

斉藤 裕子

ほどほどに遣り過す夏草枕

芝 尚子

くさめ

こん畜生餅残せし大噓

篠田 純子

われ八十大きくさめして恥ずかしや

芝 尚子

花粉症猫のくさめも聞こえたり

須賀 敏子

托鉢僧大きくさめして門に立つ

鎌倉喜久恵

父に似て噓の大き春の風

芝宮須磨子

春花粉感度良好噓哉

森 理和

隣人の大きな噓今朝の秋

赤座 典子

十二月くさめのへたな男かな

木村茂登子

裏山をころげ落ちたるめうがの子 佐藤喜孝
生きること今必死なり油蟬 早崎泰江
青蜜柑 駅員さんと顔馴染 森 理和
凌霄花庭から元氣溢れをり 山莊慶子
水輪から水輪へ尾鰭梅雨さかり 吉弘恭子
梅雨曇子鼠の尾の一文字 赤座典子
甚平がテレビと会話また始む 井上石動
どの影も地を這ってをり大炎暑 大日向幸江

雨音の遠くより来たり梅雨の夜 斉藤裕子
一斉に鳴き出してゐる夕立晴 篠田純子
蚊ばしらの弾むやうなり海軟風 定梶じょう
梅雨ごもりセロリの筋を長く引く 須賀敏子
配達夫木下闇を褒めてゆく 田中藤穂
しとしとの梅雨なつかしやゲリラ雨 長崎桂子
早苗月山田は水を捧げもつ 佐藤喜孝

喜孝抄



歩かねばならぬ時なり鳳蝶

佐藤喜孝

五年程前、蝉時雨の中にいた時、大きな木に蝉が三匹止まっているのを見た事を思い出した。雌と思われる蝉に近寄るべく、横歩きをしている蝉がいた。ゆつくりとしかし懸命な姿に感動した。子孫を残すために、生き物はいつも必死なのだ。この句の鳳蝶も歩かねばならぬ事情が有ったのだと思った。そしてそれは恋の為に……。(純子)

遠雷や散歩の犬の思案顔

早崎泰江

自分自身を犬だとは思っていない、聡明な犬と拝察した。「かつて、こんなような事が有ったじゃありませんか。あの時は散々走らされお

まけにずぶ濡れ。又、夕立ち来そうですね。エエっ行くんですか？」と作者を上目遣いで見上げる犬の表情は、おでこの皺まで見えてきます。思わず吹き出してしまいました。(純子)

生きること今必死なり油蟬

早崎泰江

“生きること今必死なり”といふ。必死でない生き方などあるのだらうかとおもふ。が、作者は今までとは違った意味で必死なのである。老人になると命を少しでも健やかに永らへたいと思ふ。しかし自然は残酷でもある。日に日に体力、気力のおとろへを覚える。手術を待つ身、足元もおぼつかなくなる。マイナス面ばかりが気になる。それらと抗ふのに必死なのである。季語を油蟬としたこの句を作る気力のある作者

はきつと、乗越えられる事である。(喜孝)

看板に隠れ家とあり竹落葉

山莊慶子

京都かしら、鎌倉かしら。手打蕎麦屋さんのような気がします。路地の奥へ行くと古民家が見えて来ます。手入れの行き届いた入口には、打ち水。竹林をカサカサと風が揺らしています。旅心をそそられる句と思いました。(純子)

凌霄花庭から元氣溢れをり

山莊慶子

夏が始ると、凌霄花・百日紅・朝顔などが元気に伸びたり花を咲かせる。夏を過ぎ秋に入っても咲くは伸びるはで果て知らずのやうである。庭に咲き登る凌霄花のお陰で庭も私も元気が溢れてくる。前向きな句。(喜孝)

水輪から水輪へ尾鱗梅雨さかり

吉弘恭子

梅雨といつても毎日雨ばかり降ってゐる訳ではないのだが、梅雨のイメージは雨から離れない。掲句も水輪の因を雨とはいってゐないが雨であらう。その水輪の下を鯉であらう、魚影が動いてゐる。省略、整理された表現が梅雨の池の面を、梅雨を表現してゐる。(喜孝)

夏帽子少女のやうなお母さん

赤座典子

私の住んでいる集合住宅にも、若いお母さんだなあと思う方が住んでいる。話してみるとしっかりしていて、びっくりした。作者の見かけた方も少女の可愛さと、母親の落ち着きの、両面をお持ちの素敵なお母さんだったのでしよう。アンバランスが良いと思いました。(純子)

梅雨曇子鼠の尾の一字

赤座典子

梅雨曇の中、子ネズミをみつけた。この子ネ

ズミの姿態の一部の尾を“一文字”と捉へ見事に表現してゐる。鼠嫌いのわたしでも少し可愛く思へた。句会で見逃した佳句である。(喜孝)

甚平がテレビと会話また始む

井上 石動

「わたしのことを詠まれてしまった」と、わたしもほかの人もさう思ふ俳句だ。と万人が思ふといふところにこの作品のプラス面とマイナス面がある。

テレビと会話するには甚平ぐらいで上等だ。モノリザや麗子の絵と対話する時は甚平といふ訳にはいかない、とてもいい話さう。自虐的でもあり、テレビそのものへの批判とも読めるが、そのまま楽しもう。

わたしが高島茂から教はったと思ふことの一つに、俳句への受容度の、アンテナの広さがある。前衛句から月並句といはれるものまで大切

にする。思ひ出しては目を見開いて句を読んでゐる。(喜孝)

どの影も地を這つてをり大炎暑

大日向幸江

喪服吾れ炎暑影なき堀に沿ふ

定梶じょう

暑い、熱い。幸江さんは、炎暑、だけでは気が取りきらず、大炎暑、とした。こういう思ひはほかの人も思つてゐる。

全快す大炎天へ枕干し

高橋さえ子

真炎天花車めく霊枢車

津野美都江

黒を着て行かねばならぬ真炎天

北川 英子

草田男の沖登四郎の沖真炎天

能村 研三

掲句、

どの影も炎暑の下で地を這つてゐるといふ。

暑さも倍加する表現である。

炎昼の影ずんぐりと這つてをる 山田美恵子

じょうさんは炎暑に影がない、といふ。真昼真、頭上から惜しみなく降注ぐ太陽の下、悲しさを咏へつつの喪への歩み。“吾れ”は懐かしさを覚える表現であつた。(喜孝)

雨音の遠くより来たり梅雨の夜

斉藤 裕子

八音の字余り「遠くより来たり」でゆつたりとした空間と時間が感受できる。理詰で読むと雨音がそのやうに聞えるのは驟雨のやうな激しい雨でなければならぬ。しかし掲句の雨にはそのやうな雰囲気はない。心の中の静かな魅力ある風景である。(喜孝)

一斉に鳴き出してゐる夕立晴

篠田 純子

夕立は、上がる“もの”と思つてゐたがさうでもなささう。

雲を吐く三十六峯夕立晴

鈴鹿野風呂

夕立晴真菰より舟漕ぎ出づる 皆川 盤水
掲句、夕立が上がり一斉に蝉が鳴き出した、といふ句意だが蝉とはいつてゐない。そこがこの句の爽やかさにもつながつてゐる。(喜孝)

梅雨ごもりセロリの筋を長く引く

須賀 敏子

セロリは香りの強い大人向きの野菜。わたしは子供の頃好きではなかつた、といふより食卓にあつたのか定かではない。何気ない表現の句であるが、“長く引く”といふ動作が加はることにより梅雨ごもりのひと時の作者が浮び上がつてくる。(喜孝)

配達夫木下闇を褒めてゆく

田中 藤穂

炎暑の中をゆく者にとつて緑蔭はオアシスである。緑蔭は公園などの木陰を思ふ。木下闇は緑蔭の広さと係はりのない無い言葉と思へる。

自詠自読

よろめきて手提袋に春の風

幸江

春は風の季節だ、最近は買物に出る時は、マイ・バックを持って行く。少し大き目のナイロンバックは日々の生活には欠かせない。足元に注意をせず心も弾み歩いていた時それは、突然にやって来た。店の前の駐車場の車止めの石に足を引かけた。身体全体が揺らいだ。転ぶ事はなかったが、ナイロンの袋は春風を吸い込みムーミンのような丸いお腹になった。私は自分を叱った。もうルンルンする歳ではないよと。

初蝶や薄ら日に風みどりなり

桂子

思えば、平均的人生を歩んで来なかった私です。

三十代の後半、仕事を辞め、何をとち狂ったか発心しと或る古刹禅寺に、作務という、掃除専門の労働だけで、五十日間籠りました。たまたま「夏前の一段落時期」ゆえ、僧侶・雲水の皆様も、リラックスタイム。親しくなった雲水さんと夜毎、山を抜け出し、下界の一杯飲み屋に、しけ込み……

周防監督・本木雅弘・竹中直人で『フラッシュダンス』という映画がありました。まさにあの世界を過ごしました。が、いづれにしても、俗界を離れ、貴重な時間を過ごしたわけです。で、発心の五十日が、その後の私に何か有為に働いたか……とと言うと、何も……ではあります。まあ、これも人生ということ。

その、しけ込み雲水さんも、時に真面目に野坐を行っていました。そんな風景です。ちなみに、野坐とは、僧堂内ではなく、随意の場で坐ること。

春先に住まいの近くで割合よく目にする景色で、今年も初蝶に出会えた日は、この句のような日だったと記憶しています。

桜も散り一斉に大小の木木が芽吹き一面若草色の頃、風もやや凪いで薄い絹の布を掛けた様な日差しに田の畦か川辺の菜の花の花弁が飛んで来たのかわ見紛う綺麗な黄色で小さくて可愛い蝶蝶に出会い、うつとりと穏やかで足取りを軽くしてくれました。

私の地方の今年の三月・四月は例年より強風の日が多くその上花粉の量も多かったので辛い毎日でしたが、風もやや弱まり、長閑でうららかな日差しに、美しく優しい黄色が空中にゆらゆらと浮かんでいる光景を暫くぼんやりと見蕩れていました。そして心に豊かな喜びが湧いて来ました。

落ち縁の青道心や柿若葉

石動

走り梅雨原子爆弾拾ってる

恭子

何時作った句なのかと忘れていた。雑な性格のせいかな原稿依頼が来てえーっ私が作ったの？と同じ手帳を十年以上使っている。娘が結婚記念日にくれたものだ。手帳を繰ってしらべた。原子爆弾は実際には見たことがない。と言うと笑われそうだが日本人で見たことがある人がいるの？そんな思いでいるとき、敗戦記念日（戦争に負けて記念日とは）のテレビに映し出されたものに目をつぶってしまいたいが、凝視せざるをえなかった画面があった。十六年生まれ、それもあまり戦争の実感のわからない田舎に疎開していた身にはこの時ばかりは瞼を閉じるのを忘れていた。

可愛い（焼け焦げた服を身につけていた）女の子が前屈みになって地に手を突いた格好で亡くなっていた。なんで前かがみなんだろうと、私の頭を何かが

通過した。……もしかしたら爆弾が落ちるのが判って拾って、投げ返そうとしたのかも……私の六感がかんじたのかも。

こんな句と思いながら当時は発表しなかったのかも知れない。今より少しばかり若かった、考えも今ならどうか、この文章が本に載るまで考えがまとまりそうにないと思いつながら……

新緑や消すことも絵を描くこと

東亜未

以前からパステルやクレヨン鉛筆を使って絵を描くことを楽しみにしています。駒場の絵の教室は月二回ですが、その時は一枚の画用紙に穴があく程画いたり、消したり、けずったりします。そういう作業が好きなのかもしれません。消えてしまったと思った線が、色が、絵ができあがっていく絵を支えてくれたり、深みをつくってくれたりします。

ごすことができず動物病院に連れて行った。私達に連絡があり、保育園に子供を迎えに行かなくてはいけない嫁と交代して病院に入った。子猫を見てびっくりした。目の玉が二つとも濁って飛び出していた。医者と言われるには目が見えないうちに鴉に突かれたのだろうと。治療をしていただいているうちに嫁と孫が帰ってきた。二時間程治療してもらい、病院では預かれないし、自宅に連れ帰ると言う。明日の看護婦の仕事はどうするのか心配だった。どうしても見過ごして通り過ぎることができなかったのだろう。息子も仕事場から駆けつけ三人で子猫を連れて家に帰って行った。心残りであったが私達も自宅に帰った。次の日の土曜日医者に行き今日明日？かもしれないと言われたようだ。どのように過ごしたかは聞けなかったが、スポイトでミルクを与えたと言っていた。日曜日短い一生を終わらせてしまった。野良猫の淋しい一生でした。せつかくこの世に生を受けたにもかかわらず残念である。行き交う人達が

黒南風や猫の尻尾のうごくうごく 恭子

我が家の猫は生まれたばかりの時に、玄關に来ていつの間にか居着いた。あれから七年東日本大震災の時前日から外に出て行って帰って来ないので心配していたら、朝家の前にうづくまっていた。片足から出血骨が出ていた。もう一方の前足は肉球がなくなっていた。お医者さんは肉球の手術は初めてと言われながらも引き受けてくださった。無事元気になった。それから外に出さなくなった。去勢をした方がいいよとお医者さんの言葉で、それもお願いした。私の洗濯の後についてきて屋上から外の景色を見ているのが、唯一外に出る機会だ。時々外に出たような気配を見せるがそれも一瞬のことだ。

ある日、夜勤明けの嫁がひと休みして保育園に子供を迎えに行く途中、道路の真ん中によると出て来た子猫がいた。自転車に乗っていたのだが、見過

見ぬふりをして行き過ぎて行くことに同じることができなかった嫁の優しさが嬉しかった。我が家に二匹目の野良ちゃん短かい限りであった。十姉妹・兎・巢から落ちた雀を娘が朝の通勤時に出会い会社に連れて行き、私がすぐ会社まで雀を迎えに行つたこともあった。電車に乗った時チチチと鳴く。周りの人がキョロキョロする。カバンを軽く叩くと鳴き止む。ついにそれも効かなくなり神田から四谷で電車を降りた。少し歩いて地下鉄に乗り換えるといいかなど、単純に思った。それも長く続かず新宿三丁目で降りた。そこから家まで歩いて連れて帰った。しかし自力で飛べるようになったが短かい命であった。そんなこともあったなあと帰り道思い出していた。

手術後のアリちゃんは元気である。秋も深まると布団で一緒に寝ることになる。いつの間にか布団に入ってくるのだ。今もこの文章をパソコンで打っていると、無理やり膝の間に入ってきて眠りこけてい

る。アリちゃんの可愛い目で見つめられていると、一日の疲れがスッと吹き飛ぶ。あゝ！幸せ。人間の勝手に翻弄されている小動物、野良などと呼ばれているが……。

今日も何処かで淋しい思いをしている子がいると思うと……。

ひまわりは皆俯きて地平線 理和

十三年前になりますが、ツアー旅行中、チェコからドイツへのバス移動の折の車窓からの景色でした。

大輪で種がびっしりと付いている様子でしたから、かなり花が重いらしく一面の全ての花がうなだれた様でした。食用油の為の向日葵畑でした。右も左も、行けども行けども向日葵畑、地平線まで向日葵畑。

どんな景色から向日葵畑になり、どんな景色へバ

スが走ったのかは記憶していませんが、広大な向日葵畑を貫く道路に、大型バスが一台、今でも止まっています。風力発電の風車が畑の道路際に何台も何台も設置されていました。真っ青な空と地平線を成す向日葵畑。啞然として見続けました。

身をひねり大月の鮎釣られけり 石動

富士五湖のひとつ「山中湖」に源を発し、富士吉田市、都留市、大月市を抜ける川を「桂川」という。この川が神奈川に入り、相模川となる。たぶん古代大月の地は、秦氏が占拠していたのであろう。桂川・葛野などの雅な地名が存する。そもそも「大月」そのものが、秦氏のシンボル。で、余談はさて置いて、この「桂川」は、ちょっとした「鮎釣り」のメッカ。家から歩いてみすぐのこの川に、六月の解禁には他県から大勢の釣師がやってくる。この時期は、私の

「ちよつと吟行」の絶対の句材を提供してくれる。おおおお、釣られたねえ。元氣いいねえ。いよつ「大月ネイティブ」の鮎たちよ。

大月の鮎たちへの、賛歌でした。

余談其二。私の兄者は、夏は沢釣り、冬は猪打ちのベテラン。私には、その才も趣向も皆無。

深海の冥さ思へり日射病 じょう

海洋学では二千米以深を深海というそうですが、近年世間を賑わしている深海動物相では、陸棚の外れ（水深二百米）より深いところにすむものをいうそうです。

ここ一、二年前からいきて発見されている大王いかは、それ以前には死んだものがたまたま発見されるだけの種でしたから、百科、辞書などには、「まれに死後漂着したりまっこう鯨の胃から発見される」などと説明されています。

それだけ生きて見つかるということがなかったので。

それが、私の近辺だけでも去年中に二杯も生きて捕らえられている。大地震の前触れでは、と心配される所以なのです。しかし掲句を作った時は深海魚も大王いかも念頭になかった。リュウグウノツカイというロマンチックな名前をもつ硬骨魚（きれいだが見馴れない形だからやっぱり気味がわるい）が時化たあと、年に数尾うちあがる程度でしたけれども、どうもこの魚は深海のものではなさそうですし、当時は深海生物が話題にあがるのがなかったのです。

ですから、句で遺った「深海の冥さ」は、いわば成句、成功した措辞ではなかった。

それが近年のなりゆきで「深海」のうけとりかたが違ってきた。深海のくらさの中に生物相を連想することが可能になった。

熱射病には、血液循環の障害で目先が暗む症状が

出ます。前述のごとく日射病と暗さのとりあわせは平凡。控えめに投句したのですが、鑑賞のしかたが現在はちがって来た。

老鷲や國を思つてなにがわるい 定梶じょう

阿川弘之に同名の随想文があつていささか具合が悪いが、別に真似たわけではない。しかし真似たと理解してもらつて困ることもない。というわけで掲句を投稿したのですが、なぜ「老鷲」を据えたか、は記憶がはつきりしない。

スランプ気味の時に、自分で題を出しておいて作る、ということをする場合がありますが、この句もそうした時のものか。

しかし今読んでみてこの「老鷲や」は悪くない、とも思うのです。自分の句を自ら褒めること愚の骨頂、と言われそうですが、十年前の作ですから自意識はうすれてしまつてゐる。その上で読み返してみ

て、「ウン老鷲は悪くない」と。

全天の星降る櫛の氷柱かな 石動

小学生の頃、八ヶ岳山麓に、我が家の小さな避暑小屋が完成した。父、兄が、駅から小屋までの道を切り拓いた。用水は、もちろん沢水。ようやく電気も引けた。中学生になると、電車を乗り継いで、悪ガキ仲間とここで遊んだ。

最寄駅・小海線甲斐小泉駅（平山郁夫美術館あり。是非お越しください。以上、学芸員になりかわり。）から数分の処に甲府第二高校（女子高）の寮があり、冷やかし（冷やかされ）に遠征をもした。時に一人で数日、この小屋で過ごした。

青空、流雲、木々の音、葉擦れ音、鳥声、木洩日、沢音。月明。星の輝き。真闇。そして一人の夜の怖さ。高校受験だ、籠つて勉強一筋だ……の、大法螺で、冬の二週間を一人で過ごした。酔うとは如何な

る事ぞ、を体験すべく、サントリーレッドをがぶ飲みした。世界が回った。酔うとはつらき事を学んだ。高校時代、やっと「お隣さん」が出来た。それが、言語学者の金田一春彦さん。

当時の私が今の私なら、お隣さんのよしみで、ずかずかとお邪魔して、あれこれ聞けたのに……。そう言えば、学生時代の部活の悪友の専任教授が国語学者の大野晋さん。

ああ、私のすぐ傍には、日本語の大家が二人もいたのに……。と、吾、ことに於いて後悔しつ放し。

八ヶ岳山麓での経験が、この句となりました。

すすり飲む湧水甘し独活の山 石動

人様とはかなり異質な人生を、私は歩んで来ていると思つてゐる。

五十代の後半に、林業作業人夫を二年間した。機

械など触つたことのない私が、斧・鋸・刈払機・チェーンソーを操作し、除伐・間伐をする。山道も作れば、除草も、苗木植付もする。現場は山の中腹以高。そこまで一〜二時間かけて歩いて行く。そして作業・下山の日々。そんなわけで、体の絶頂期には、休日大菩薩峠トレッキングを、ほぼ早足ですいすい。同伴したカミサンが、以前の私とのその差異に、目を丸くして。

人夫として自然の中にいられる事で、俳句のたしになるぞ……。の考えもどこかに在った。期待に違わず、山は、春夏秋冬で、別々の姿を見せてくれた。

山仕事の身体に、ちよろちよろ湧く水の甘さよ。

知音之卷

二〇一四年二月二五〜二〇一四年十月九日

1	知音みな性善説か女郎蜘蛛	佐藤	竹洗
2	甚平すててこ男の子みったり	井上	石動
3	ものの値がだんだん上がるそして扱て	定樞	じよう
4	砂のあらしのアナログテレビ	洗	う
5	隊商の駱駝へあをし後の月	動	う
6	ちぢに悲しき秋も腹空く	う	洗
7	ひきあけの柿のさにてて身のふたつ	う	洗
8	自動販売避妊具を買ふ	う	動
9	ロボットの大概話す時節来る	動	う
10	傅かしたる裸の王様	洗	う
11	般若湯呑むとも不犯立てとほし	じよう	動
12	裏戸叩くは風の記念か	動	う
13	人かげの寄るそぶりして忘れ花	洗	う
14	月光冷ゆる広き川幅	う	動
15	圓生の微細に尽くす鍼沢	動	う
16	父のはぶりに宗旨をしらべ	洗	う
17	花爛漫この盃を受けてくれ	動	う
18	頼刺干すや今が盛りで	う	動
19	ここいらでついぞ見かけぬ春日傘	洗	う
20	ルノアル女みな太目なり	動	う
21	でいーかつぶとは何のこと子に聞かな	う	動
22	伊勢丹の中迂回してゆく	洗	う
23	土用入なべて食材産中国	動	う
24	冲天の日を水母まぶし	う	動
25	那岐と那美足りあはぬもの足りあはせ	う	動
26	神事のごと草城俳句	動	う
27	田舎つべホテルロビーに畏まり	う	動
28	書割めける富岳暮れゆく	動	う
29	銭湯を出でし親と子路地の月	洗	う
30	二百二十日の茶柱が立つ	う	動
31	グールドの仏蘭西組曲こぼれ萩	洗	う
32	むかしA B今はC D	う	動
33	竹藪の雀の学舎健在ぞ	動	う
34	目高は群れて口を揃へる	う	動
35	川の向こう岸にばっかり花の宴	洗	う
36	あをきみそらののどかなるかな	う	動

イ	返事待つ間の衝たゆたる	蟻風
ロ	恋の連哥に胸つぶれたり	士川
ハ	春日のどかにすみよしの浦	士喬
ニ	二十年來洪水のなし	田福
ホ	借馬嘶く約束の門	大魯
ヘ	楼の灯による胡蝶一片	士川
ト	琵琶かきならす秋草の上	士川
チ	雨にたたけし鳥居経りたる	維駒
リ	頭にさはる人にくき也	几董
ヌ	吾妻ふりなる哥ぞかはゆき	田福
オ	イめばなほ夕べ身にしむ	几董
ル	白き衣きてまぎれよる恋	几董
オ	いざ笛かけて聞かん小男鹿	二柳
A	うたげして花の日向に老夫婦	蕪村
B	花かつみ刈りとるほどもなかりけり	
C	十六夜の暗きひまさへ世のいそぎ	
D	ゆかしさの余りて須磨の帰り華	
E	印籠の螺鈿こぼるるゆかしさは	
F	花の雲にほひあまりて南す	
G	流れ矢の水に落ちつつ行く月や	
H	梅酒やとくりの底にわすれられ	
I	醒とけやらぬ春もやや過て	
J	日は西に花の山路も七まがり	
K	糸萩の蒔絵の割籠露けて	
L	後夜の雨うつほ柱のゆかしきは	
M	白鵬をはなつ雲間に月見えて	

蕪村の平句だけ眺めてみた。〈下段〉が蕪村の付句。眺めてゐて人情句が多いやうに思へた。次は違いがあるのか芭蕉の付だけを読んでみたい。〈上段〉は蕪村の付けの前句。上下段対応してゐません。どの組合せか想像してみてください。なお読みやすくするため原典に忠実ではありません。

*1 (鹿を呼ぶ笛) *2 弁当箱 *3 夜半から朝まで *4 空柱箱形の豎樋 *5 白鳳に同じ
Eの句は後発句に「うめちるや螺鈿こぼるる卓の上」 答は→

ニ A 一 B 一 一 C (一) 一 D 一 E 一 一 F 一 一 G 一 H 一 一 I 一 一 J 一 K 一 一 L 一 M 一 一

月刊 俳句界 2014年 11月号
 定価 1000円(税込)

特集
俳句評論復活へ!
 ●インタビュー 堀切 実 (近世文学者)
 ●評論家たちの名言
 山本健吉 赤城さかえ 山下一海 村上護他
 ●精鋭に問う! 評論復活の鍵
 榎本好宏 復本一郎 田島和生 筑紫警井
 仁平勝 岸本尚毅 中村雅樹 坂口昌弘
 中岡毅雄 大輪靖宏 今泉康弘

作品 松浦加古 佐久間慧子 大木さつき
対談 小林綾子 (女優) 佐高信の甘口で「コンチハ!」

◆特集 **あなたの俳句はなぜ佳作どまりなのか?**
 ◎エッセイ 辻 桃子
 ◎実践クイズ 俳句会 指導 増成衆人「漢」
 ◎特選と佳作の境界線 例句と解説
 松本 旭 山崎ひさを 茨木和生
 古賀雪江 対馬康子

おとなのエッセイ 山本一力 加藤登紀子 他
 幸セレクトジョン結社「炎環」 石寒太

私の一冊 原和子「鹿火屋」
 魅惑の俳人 手紙 小澤克己
 逆さへ

※一部変更の可能性あります。
 株式会社 文學の森
 お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
 TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

あとがき

明日火曜日は月一回の貴重なあを句会。ところが台風第19号がじわじわと東京に近づいてゐる。予報では句会のはじまる頃は東北地方に抜けてゐると、期待してゐる。この台風は「ヴォンフォン」といふ名前が付

いてゐるらしい。昔は西洋の女性名が付けられてゐたが、いまは台風委員会といふものがあり、日本ほか14カ国等が加盟してゐる。今回はマカオが付けた。「雀蜂」といふ意味とのこと。痛さうな名前だ。日本は星座名から「クジラ」「カンムリ」などと付けている。次に来る20号台風は「ヌーリ」、もうこの辺で今年は台風と手打にしたいものだ。マスコミは台風何号が……といつてゐるが、「スズメバチ台風」のほうが覚えやすいのはわたしだけであらう。

二〇一四年十月号

発行日 十月十三日
 発行所 東京都中野区中央2・50・3
 電話 090 9828 4244
 ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房
 カット/恩田秋夫・松村美智子
 表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)/一年
 郵便振替 00130・6・55526(あを発行所)
 乱丁・落丁お取替えます。